浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成１１年３月　　第６号

私たち婦人会も、大谷貴代子御裏方様を総裁にいただき、東本願寺派婦人会の結成と同時に支部の登録をさせて頂きました。
その折りに三つの信条が掲げられました。
『お念仏と共に心豊かな家庭生活をいたしましょう』
『寛容（柔和忍辱）と感謝（和顔愛語）の心で和やかな社会を築きましょう』
『未来を担う子供たちに仏さまと共に生きる喜びを伝えましょう』
この信条をもとに歩ませていただきたいと思っております。

さてお彼岸が参りました！
お彼岸とはお浄土をさす言葉です。そして春秋の太陽が真西に沈む日を中日とし、その前後三日間を含め仏教週間としてお浄土を偲んで参りました。
では、なぜお彼岸は「仏教週間」なのでしょうか？

知りあいの、あるサラリーマンのご家庭を訪ねたときです。
その家のお母さんから、小学四年の女の子に「お彼岸ってどんな日？」
とたずねられ、思わず返答に困って、仕方なく「お墓参りする日のことよ」
と説明したという話を聞かせてもらいました。
お彼岸、彼岸の中日、彼岸だんご、暑さ寒さも彼岸まで・・・と、
日頃慣れ親しんで用いている「彼岸」と言う言葉は、正面からその意味をたずねられると、案外答えられない人が多いのではないでしょうか。
彼岸－彼の岸です。煩悩でよごれきった此岸（この世）に対して彼の岸、
つまり清らかなお浄土の世界を指し示す言葉です。
お釈迦様の入滅後、その教えを説く人も聞く人も無くなってしまうという末法思想は、平安時代末期に日本各地に広まり、相次ぐ戦乱の中で人々は、極楽浄土に強いあこがれをいだくようになりました。
末法の時代に入るとされた翌年の一〇五三年、京都・宇治に平等院鳳凰堂が建立されたのも、そうした時代背景による物です。
また、親鸞聖人が七高僧としてあおがれた善導大師の『観経疏』に
「その日、正東より出でて、直に西に没すればなり。弥陀の仏国は日の没するところにありたり」とありますように、お彼岸には太陽が真東から昇り、真西に没することから、西方十万億土にあるという極楽浄土をしのぶという習慣が、わが国に古くから定着してきました。

お彼岸の中日と前後の三日間を含めた七日間は、お浄土をしのぶ「仏教週間」として、ずっと日本人の生活の中に定着してきたのです。
お彼岸にご先祖のお墓参りをするならわしは、そういう清らかなお浄土に往生されたご先祖をしのんで行われるようになったのです。
真宗では、このようなお彼岸のいわれにちなんで、仏のお徳と仏国土をたたえる彼岸会の法要がつとめられます。
家族そろって、お参りしたいものです。

仏教文化研究会編『門徒もの知り帳』より抜粋

本弘寺婦人会も、お参りにこられる方々と共に清らかな気持ちでお彼岸をお迎えできればと、一生懸命お仏具磨きをさせて頂きました。
お彼岸中は、テントの中でお茶を頂きながらおしゃべりをしたり、
又、日頃疑問に思っておられることなどをお聞かせいただければ嬉しいです。
是非、お寄り下さい。お待ちしております。

合掌

～役員より一言～　　「お彼岸を迎えるにあたって」

寒かった冬も終わって、日増しに春めいた暖かさを感じられる頃になりました。お彼岸の法要を待ち遠しく思うこの不思議な期待は、里帰りをするような気持ちです。
世の中に一人しかいない私、ただ一度だけの人生だから粗末にできない私。
苦しいこと、楽しいこと、嬉しいこと、これも皆この世に生きているからこそ感じられる唯一のあかしです。
世のしがらみばかりの人生で心に反して知らず知らずのうちに汚れる自分を洗って下さり、素直な自分にしていただける故郷のようなこのお彼岸の法要は、私にとってとても大事な行事に思われるのです。
又、例年四月八日は『灌仏会』（お釈迦様のお生まれになった日）があり、桜の咲き乱れる中、お琴・尺八の演奏があり、お花見会となっております。
お寺では、いろいろなおもてなしをして戴き、楽しいひとときを過ごさせていただいています。
どうぞ皆様のご参加を心よりお待ちしております。

婦人会入会のお知らせ

◎　入会はいつでもできます。
◎　会費は一ヶ月３００円で、１年分前納とさせて頂いております。
◎　定例会は、毎月８日の午後１時から３時までです。